

初代医学部長 北里柴三郎

1984年以来、二万円札の「顔」であった福澤諭吉だが、2024年の紙幣刷新で「引退」することになった。一方で千円札の新しい「顔」となる北里柴三郎は「近代日本医学の父」であり、第1回ノーベル生理学・医学賞の候補にも選ばれた。福澤との深い親交でも知られており、慶應義塾大学医学部初代学部長を務めた人物である。

武芸に打ち込んだ少年が 医学の道へ

1853（嘉永6）年、北里柴三郎は肥後国（熊本県）阿蘇郡小国郷北里村に生まれた。幼少期の北里は武芸を好んで学問は二の次だったが、両親は学問を強いた。それでも武芸への思いは覚めやらず、いつかは軍人になりたいと考えていた。

1871年に父親の勧めで熊本の古城医学所（後に熊本医学校と改称。現在の熊本大学医学部）で学ぶことになったものの、軍人志望に変わりはなかった。転機は医学所のオランダ人教師であるマンسفエルトとの出会いだった。オランダ語がよくできる北里に目をかけ、彼に医学の面

白さを説いた。ある日の実習で北里は初めて顕微鏡で拡大された身体組織を見て感激。ようやく医学を学ぶ意義を見出すことができた。マンسفエルトは北里に東京やヨーロッパで医学を修めることを勧め、1874年、北里は故郷を後に東京に向かった。

ドイツでコッホに師事し 「血清療法」を確立

東京医学校（現在の東京大学医学部）に進学した北里は同校の「パンカラ」な気風の中、勉学に集中しながらも豪放な学生生活を送っていた。パンカラが過ぎる学生たちの扱いに困り果てた長与専

（提供・学校法人北里研究所）



熊本医学校の職員および学生。中央がマンسفエルト、向かって左が北里

斎校長は、幕末期に緒方洪庵の適塾で机を並べた親友に相談し、学生を監督する「寮監」2名を派遣しても

らった。実は長与校長の親友というのは福澤諭吉だが、この時はまだ二人は出会っていない。

1883年に東京医学学校卒業後、内務省衛生局に職を得た北里は、2年後の1885年、ドイツへの官費留学を命じられる。ドイツでは細菌学の泰斗ローベルト・コッホに師事し、世界で初めて破傷風菌の純粹培養に成功。さらにその毒素に対する免疫抗体を発見し、それを使った「免疫血清療法」を開発。世界的名声を得ることとなった。



破傷風の血清療法を確立したドイツ留学時代の北里

伝染病研究所設立が縁となり 福澤諭吉と生涯の親交を結ぶ

内務省はドイツで業績を挙げた北里の帰国を待ちわびていた。当時、急務であった感染症・結核対策のため、国立の伝染病研究所を設立する準備を進めていたからだ。北里が帰国したのは1892（明治25）年。しかし帝国議会で伝染病研究所設立が承認されるまでに最低2年を要することが判明した。北里の上司になつていた長与専斎は、またしても福澤に相談した。すると福澤

は私立の伝染病研究所設立案と援助を約束し、同年に伝染病研究所が設立された。福澤諭吉57歳、北里柴三郎40歳。二人の親交はこの時から始まり、北里にとつて福澤は生涯の師といえる存在となった。

「……嗚呼、悲哉。余は衷心実に師父を喪いたるの感あり。……余不敏といえどもまたその遺業を守り、その遺訓を体し、切磋研鑽をもつて万一の報恩を期せんとす」。



北里記念医学図書館内の胸像

福澤の死（1901年）に際して、北里が寄せた弔辞の抜粋である。

福澤の死後、慶應義塾は創立60年を期して、北里に協力を仰ぎ大学部に医学科新設を計画。1917年に開設された医学科の学科長（後の医学部長）に迎えられた北里は、創立記念パーティーで次のように聴衆に語りかけた。

「予は福澤先生の門下生ではないが、先生の恩顧をこうむったことは門下生以上である」

北里は1928（昭和3）年まで医学部長を務め、その後も顧問として、生涯、慶應義塾大学医学部を支え続けた。その功績をたたえ、1937年には北里記念医学図書館が誕生した。図書館の入口にある北里の胸像は、今日も信濃町キャンパスで医学を志す若者たちを見守っている。